

寺地はるな／咲くやこの花インタビューvol.25

寺地はるな(てらち・はるな)【令和2年度 文芸その他部門[小説】】



もともと文章である以前に「文字が好き」と話す作家の寺地はるなさん。書かずにはいられない衝動をきっかけに、会社勤めの傍ら35歳から小説を書き始めました。2年後の2014年には『ビオレタ』で第4回ポプラ社小説新人賞を受賞。翌年、単行本化され、作家デビューを果たします。以降は毎年数冊のペースで新作を刊行し、この5年間で17冊を数えます。日常に潜む光の粒を拾い集めるように、ささやかだけど掛け替えのない良質なエンターテインメント小説を生み出し続ける寺地さんに、創作の裏側や小説に込めた思いなどを伺いました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「自分の中で言葉が枯れてしまったことに気付いて、怖かった」

「咲くやこの花賞」受賞おめでとうございます。

ありがとうございます。だいたい文学賞では「候補になりました」と連絡が来るものなのですが、出版社の方からのメールに「受賞」とあったので、「はなから賞をいただけるの？ 本当に!？」という感じでした(笑)。

そうだったんですね。賞の存在はご存じでしたか？

はい。区役所とかで関連のイベントのチラシがあるのを目にしたり。過去にも色々な作家さんが受賞されていますよね。津村記久子さん、柴崎友香さんなどは私もすごく読んでいて、経歴にも載っていたので、存在は知っていました。賞を頂けるのは嬉しいですね。31歳の時に九州から大阪に移り住んだのですが、当時はまだ小説を書いてはいませんでした。簡単にいうと知り合いもいないし、暇だし、話すこともないしで、小説を書き始めた面もあったので。「咲くやこの花賞」は大阪文化にちなんだ賞だから、自分が大阪に10年以上住んできて、ここで生きていくと決めたこと、小説を書き始めたこと、2重の意味でも最高の形で肯定して貰えたという感じがして嬉しかったですね。

暮らす場所は、作品に影響するものですか。



うーん、でも大事ですよ。場所が違えば展開する話も当然変わってくるでしょうし。風景を書くことひとつ取っても、そこが何であるかでも違ってくると思います。大阪は河が多いですよ、生活もしやすいです。

大阪へ移り住んで35歳から小説を書き始めました。最初は書かずにはいられない状況だったとか。

ちょうど子供が1歳ぐらいの時で、それぐらいの年齢だと行動も制限されて、会話も成立しませんし、ぎりぎりの心境というよりは……あのね、話す相手がいないとね、言葉がどんどん枯れていくんですね。漠然と考えていることはあるんですけど、それを言葉にするってことが無くなっていたので。たまたま誰か大人と話す機会があったときに、全然会話ができない。自分の中で言葉が枯れてしまったことに気付いて、すごく怖かった。だから取り戻したかったという感覚があったかもしれません、書くことで。

最初から小説のような形態で？

最初の最初はね、多分自分のことを書こうとしたと思うんですね。自分の中でわだかまっていたことを、とりあえず文字にすることから始めたのかな。でもなんかやっぱりね、恥ずかしいものなんですよ、自分自身のことをそのまま書くっていうのが。でもそこに一回フィクションをかませると、自分の気持ちを一回別のところから見られるというか。そういうのが良かったのかもしれないですね。

当時は、会社にお勤めされていたか。

生活、時間、体力的にはギリギリなんですけど、全部の家事が終わって、23時ぐらいから午前1時ぐらいまでが書く時間でした。書くことは心地いい時間でした。なんですけど、子供が夜泣きをするので、「いつ泣き出すんだろう」という、戦々恐々な感じで書いていた記憶がありますね(笑)。

デビュー後、改めて小説を書くためのハウトゥー本などにあたったというエピソードもあります。小説家デビューは想定外？

学校に通われて作家になられる方もいますよね。当時は、家でできることでお金を貰えたらいいなと思っていました。通勤が嫌だったので。小説じゃなくてもよかったのかもしれないですけど。でも作家になるというのも、ピンからキリまであるというか。デビュー前にも何回か賞には応募していて、2、3回、いやそれ以上は落ちたりはしているので、デビューまでも順調ではなかったのかな。それだけで食べていけるほどお金を稼ぐというイメージまでは湧いていなかったかもしれないですね。



2019 年からは、兼業をやめて作家業一本に。

単純にね、体力が続かなかった本当に(笑)。やはり仕事が一番時間を拘束されるしキツイので、兼業の頃は 2 回ぐらい地下鉄の階段から落ちてるんですよ。

ええっ！！ 落ちかけた、ではなく。

落ちました。「あ——っ」とか言って、2 回ぐらい。幸い打ち身とかで済んだんですけど、いつか死ぬと思って。

命がけの決断だったのですね。大事に至らずに済んで良かったです。

「小説は読者がいて初めて完成するから、同じ本でも違った色合いになる」

寺地さんは読書家でもあります、一カ月では何冊ほど？

あんまり数にはこだわらないですが(と、記録代わりのインスタグラムを開き)月に 17、18 冊ぐらい。読まなければというよりは、単純に読みたいですね。

高校3年生のとき、教養のために読み始めたそうですね。そういう意味で、読書が助けになったことはありますか？

うーん、あんまり役に立たないかな、読書って。自分が「新発見！」と思いついたことでも、すでに何百年も前の本に書いてあったりする。「自分が思いつくようなことは、だいたい他の人がすでに思いついている」ということを思い知らされることはあります(笑)。知らないと、やっぱり傲慢になるじゃないですか。

新発見とは、アイデアとか表現方法とか。

そういうことですよ、小説の表現であったり。例えば、本を読むってことは「何かしているようでいて、じつは書いた人に代わりに考えてもらっているような行為でもあるな」とか、「考えているようで、じつはちょっとその間自分の思考は停止しているような要素はあるな」とか。漠然と思っていたんですけど、何百年も前に同じことを誰かが書いてあるのを見て「へえ、そうだよな…」と思いました(笑)。

また、文章である以前に「文字」がお好きとも。



そういう方は一定数いらっしゃると思うんですが、単純にそこに文字があったら読んでしまう。例えば、ご飯を食べていても、目の前にパッケージの裏にある成分表とかがあったら読んでしまう。それは好きというよりは習性かも。

習性というと、小さなころから？

はい。子供のころに引き出物か何かで頂いたお砂糖の詰め合わせがあって、そのパッケージに「りんご。アダムとイブが食べたりんご……」みたいな、ポエムみたいなものを書いてあったんですよ。あまりにも繰り返し読んだせいでまだ覚えていて。だから何回も読んだものは、好みに関係なく覚えてしまう。

そう聞くと、学校でも歴史や社会の暗記物が得意そうですね？

できそうなのにねえ。なんであんなに学校の勉強ができなかったのか、自分でも謎です。耳に入ってくるのがとにかくダメなのかな？ 国語の授業とかも耳から入ってくる状況が受け止められないので、ついほか

のページとかを読みふけっちゃって、そのまま授業が進んでいく。読んでるといっても、奥付とか全然関係ないところだったし(笑)。

読書は純粋に読み物として楽しめるものですか？

そうですね。そんな嫉妬に狂って読めないとかもないですね(笑)。一応傾向というか、自分がどんな本と一緒に売られているのかを、できるだけ知っておきたいという思いもありますし。

書き手としての意図と、読者の受け止められ方に違いを感じますか。

感想は一応見ますけど、全部を参考にはしないですね。読む人の、読むようにしか読めない。確実に書いた側の思ったようには読まれなと思うんですよ。知っているもの、観ているものとかも全然違うから。同じ本でも、それぞれ違う色合いになっている。でも小説は読む人がいて初めて完成するものなので。読んだ人がどう思ったのかが最後の仕上げだから、読まれ方は全部違っていいと思うんです。



「孤独でも、別の誰かを目指す必要はないんじゃないかな」

寺地さんは過去のインタビューで、結局自分は「家族は他人」、世間で言われる“そういうもの”に対する「それって本当？」という違和感、この二つについて書いているんだとお話されています。

何か原体験があるというよりも、日々思うことかもしれないですね。実家の家族とは仲が悪くもないけど、良くもないとか。『水を縫む』(集英社)という本では「かわいい」ということについて書いている部分があるんですけど。「かわいい」という言葉は乱用というか、すごく溢れているので。みんなが同じものを目指す必要はないだろうとは常々思いますね。

同じものを求める傾向にあると。

例えば、お洒落をしなくなる場合がありますよね。子供が小さいとか、忙しいとかで外見に気を遣う余裕がない時期とか。そういう時「女を捨てている」と表現されることがありますが、性別は捨てられるものではないですし、その表現は「全員がお洒落をすべきだ」「見た目に気を遣うべきである」と決まっているからですよね。そういうことに「本当かな？」「おかしいんじゃないかな？」と思ったり。いろいろありますね。

小説の中にそういった思いを忍ばせて。

というより、出てきてしまいますね、勝手に(笑)。

また「大事件よりは日常的なことを、みんなに届くよりも誰かひとりにでも届くものを」という発言もあり、印象的です。

「みんな」という文句も漠然としすぎていて、考え始めると「誰？」ってなるから。それよりは、特定の誰か一人ぐらいを思い浮かべて書くほうが、書きやすいかもしれないですね。

実在のひとを？

そうですね。「対象読者」というか、ひとり設定してそのひとだけに刺されば良いぐらいのイメージです。架空の設定もあるし、知り合いの誰かを思い浮かべるときもある。もちろん言わないですけどね、「あなたを思い浮かべて書きました」とか。怖いだらうから(笑)。

物語にリアリティが生まれる秘訣でしょうか。



うーん。でも、みんなが好きなお話というのはないと思うんですよ。好きというより「みんなに嫌われない」かな。そういうお話を書くのは難しい。というか、誰も傷つけない小説や文章はないと思うんです。だから書く上で、覚悟しなくちゃいけないとはいつも思っていて。誰かを傷つけたとしても主張したような、伝えたいような言葉なのかと。その上で、どんな人に届けたいのかを明らかにするために、対象読者をイメージするのはかな。ひとりだけの誰かを。

これまでの「対象読者」を並べたときに見えてくるもの、相違点などありますか？

「この人はこれを面白いと思ってくれるかな？」ぐらいだから、バラバラですね。性別も年齢も違うけど、人間のタイプみたいなものがあるとすれば、同じような人たちかもしれないですね。

それを言葉にさせていただくことはできますか？

どうだろう。物語を必要とするひとつね、基本孤独だと思うので、孤独なひとかな。友達がいないとか、家族がいないとか、そういうことじゃなくて。世界と自分との間に壁みたいなものがあって。壁というか、膜というか。とにかく一枚隔てられているような感覚がみんなあるんじゃないかな、そのひとたちには。

寄り添いたい、あるいは膜を破る手伝いをしてあげたい？

(膜は)破らなくていいと思います。それが一番いい距離感なんだろうから、私もそうだし。よく作品に対して「成長」ということばを感想にも、宣伝文句にも使われるんですけど。でも私は成長はしなくていいと思うし、成長を描いたとはあまり思っていないですね。

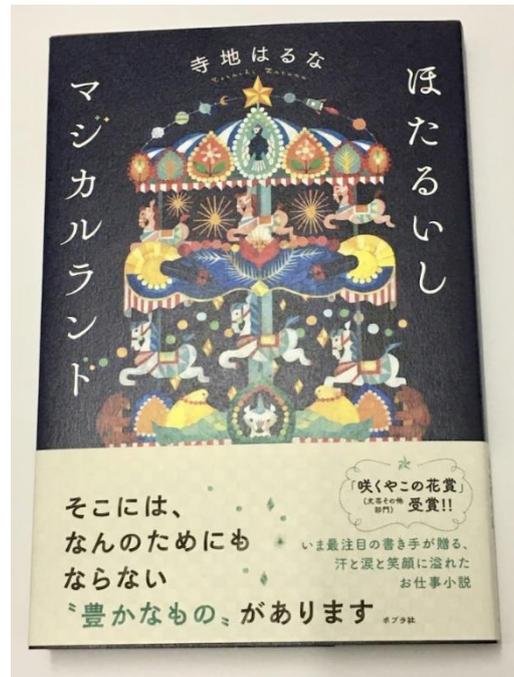
主人公らが新たな視点を得てポンと世界が明るくなる感じを「成長」と表現されるのかもしれませんが。でもそれが必ずしも膜の外に出ることではないと。

そうです。「成長」という言葉が意味するような、何か別のより素晴らしい人間に変わって欲しいということではなくて。そのままでもいいという言い方も、なんかちょっと違うな。自分が自分のまま生きて行けばいいというような。別の誰かをを目指す必要はないんじゃないかな、ということかな。

「大阪のひとは、フランクだけど詮索しない距離感が素敵です」

2021年2月10日発売の最新刊『ほたるいしマジカルランド』(ポプラ社)は、関西で人気の遊園地「ひらかたパーク」をモチーフにした作品だそうですね。

読む人が読めば、“ひらパー”だと分かると思います。京阪沿線に住んでいるので、私も家族と行ったり、バラを見にひとりで行って写真を撮ったりしています。取材では先方が「遊園地」という言葉を何度か口にされていたのが印象的でしたね。世界観を作り込んだ「テーマパーク」ではなくて、もっと楽しいことを詰め込んだような空間なんだろうなと。タイトルにある「ほたるいし」は架空の地名なんですけど、蛍石(ほたるいし)自体はフローライトという石の和名です。加熱や紫外線を照射したりすることで発光するそうです。



主人公は？

遊園地ではたらくひとが順番に出てくる話なので、老若男女です。本はね、いつもすごく素敵なカバーを書いてもらえて、目次とかもきれいにレイアウトしてもらえるので、「すごいな」「そういうことだな」と毎回新鮮な驚きがありますね。



作品を生み出す原動力とは？

基本的に書くことは、私にとってすごく楽しいことです。締切に遅れることもないですし。ただ、アイデアは毎回絞り出すようにして書いています。依頼に対して無理やりにでも絞り出す。それでも？ 楽しいですよ(笑)。

各文学賞がひとつの目標に？

もちろん賞の受賞は嬉しいですよ。ただそれを目標にするのは違うと思っていて。何がしたいかといったら、結局は「書き続けたい」ということなんですけどね。それしか残らないですよ。読む人がいなくなったら、そこで終わり。需要がなければ本を出すこともできなくなるので。ずっと読まれ続けるには、良いものを書くしかない。シンプルに「良いものを書きたい」「書き続けたい」。このふたつしか残らなくなる。難しいですし、面白さにもいろいろありますけど。でもやっぱり、面白いものが書けるようになりたいですね。

ちなみに最近の関心事は。

「普通」という言葉もよく作品の帯とかにも使われるんですけど、「普通って何だろう？」ということを書いてみると。でも私の中では「全員が違うのが普通だ」と答えが出ていることなので、そういう疑問は抱いていない。「何？」と問うのではなく、当たり前のことを書いていけたらいいなと思います。

いまの自分は、子供の頃に思い描いていた大人の自分と比べてどうですか。

想像よりは楽しそうで良かったね、とは思いますがね。あんまり楽しそうな大人を見たことがなかったからかな、勝手に「いいものじゃないんだろう」と決めつけていたんですけど。でも実際は 40 代以降のほうがラクで、楽しいかもしれないですね。

最後に恒例の質問です。寺地さんが「咲くやこの花賞」を贈呈してもいいと思う、大阪名物を教えてください。

人との距離の近さかな。大阪に来た当初、すごく良いなと思ったんです。スーパーとかでも急に知らない人から友達みたいに話しかけられることがあって。地元では知らない人に話しかけることなんてなかったのでもそれが、馴れ馴れしいとか、探られている感じとかでもないというのが良いなと思って。フランクだけど、踏み込んで来ない感じが「まあ素敵！」と(笑)。あと、古いものがわりと残っていますよね。初めて地下鉄御堂筋線を利用したときは、古さが良い感じで残っていて素敵だなと思いました。



【略歴】寺地はるな(てらち・はるな)

1977 年、佐賀県生まれ。結婚を機に、大阪に移住。2012 年、会社勤めの傍ら 35 歳から小説を書き始め、2014 年、『ビオレタ』で第 4 回ポプラ社小説新人賞を受賞。2015 年 6 月に単行本化され、作家デビューを果たす。2020 年、『夜が暗いとはかぎらない』で山本周五郎候補となった。ほかの著作に『ミナトホテルの裏庭には』『月のぶどう』『今日のハチミツ、あしたの私』『みちづれはいても、ひとり』『架空の犬と嘘をつく猫』『大人は泣かないと思っていた』『正しい愛と理想の息子』がある。

【受賞歴・受賞候補】2014年『バイオレタ』で第4回ポプラ社小説新人賞、2020年『夜が暗いとはかぎらない』で山本周五郎賞候補。

【公式 SNS】Twitter @tomotera0109